放送局の社屋を「つくる」ということ

朝日放送株式会社
代表取締役社長
渡　辺　克　信

<はじめに>

朝日放送は、2008年6月、42年間慣れ親しんだ大淀の旧社屋に別れを告げ、「ほたるまち」の新社屋に移転しました。旧大阪大学医学部附属病院の跡地です。

放送局の社屋というのは、おそらく他のどの建物とも異なる、極めてユニークな建物ではないかと思います。私は、2003年の用地取得以降、新社屋建設の統括責任者として、建物の設計から設備の構築まで、あらゆる局面に関わってきました。手前味噌はご容赦いただいて、完成・移転までの5年を振り返ってみます。

<求められた「条件」>

放送局の社屋が持つべき機能は、大きく分けて3つあります。ひとつはオフィス機能で、これは他の企業と変わりません。もうひとつはコンテンツ(最近は「ソフト」をこう呼びます）制作機能で、スタジオ・ホールなど､複数フロアをぶち抜く大きな容積が必要です。そしてもうひとつが、精緻な設備の要求される放送機能です。ひとつの社屋の中に、これらを満たす構造を同居させ、かつそれぞれが有機的につながり、効率的に配置されることが必要です。

放送には「休刊日」はありませんから､一年365日・24時間稼動し、タレントさんやスタッフなど出入りが多いことを前提としながら、電波・放送という公共の財産を守るセキュリティの確保も重要です。

さらに「水都OSAKA・αプロジェクト」という大規模再開発計画の一環である性格上、用地の面する堂島川の水辺の景観を生かす設計、また新しい「まち」に賑わいをもたらす役割が求められました。

旧社屋が在阪局では最も古かった上、震災の影響もそこここにありました。他局の新社屋を見続けてきたこともあってか、社内からの要望・希望は数多く、誰もが「夢」の一杯つまった快適な新社屋にしたいと願い、そうは言えどもコストには上限があるわけで、5年にわたる設計・建築は、何重にも複雑にからまったパズルを解くようなものでした。今思い返しても、軽いめまいを覚えます。

<新社屋の概要>

新社屋のコンセプトは、「デジタル時代の創造工場」としました。社内に設計・建築チームをつくり、いくつかのワーキング・グループを組織して、このコンセプトを中心に据え、設計・施工のプロたちと「どんな社屋にしていくか」の議論と検討を繰り返しました。

設計・監修　隈研吾建築都市設計事務所
設計・監理　NTTファシリティーズ
施　　工　　竹中工務店
敷地面積　　8,500㎡
建築面積　　6,960㎡
構造規模　　地上16階、地下1階

設計は、著名な建築家、隈研吾さんにお願いしました。建物の中ほどにビル風を軽減するための「風穴」があり、堂島川に向かってなだらかにウッドデッキが広がるというユニークな構造です。

冷暖房効率を高めるためルーバー（壁面を覆う木製のカバー）を取り入れるなど、努めて環境に配慮する設計になっています。外見からはわかりませんが、震度6強の地震が来ても放送を途切れることなく行えるよう、免震構造を採用しました。

この建物の中に、テレビスタジオが4つ、ラジオスタジオが5つ。それに258席の可動式座席を持つ公開スタジオ兼用のホールが効率的に配置されています。「周囲と調和する建築」という隈さんの設計思想が素晴らしい形で結実していると思っています。

＜設備について＞

放送における技術の中心は、突き詰めれば「放送素材を切り替えて送り出す」ことです。よくドラマでディレクターが指をパチパチ鳴らして「はい、3カメ！」と指示を出す場面がありますが、要するにカメラという「素材」を切り替える指示を出しているのです。スタジオに付随するこの設備は「サブ」、副調整室と呼ばれます。これに対し、全番組と全CM、それぞれの映像と音声を正確に制御し送出する役割を担うのが「マスター」と呼ばれる主調整室です。「マスター」から見れば「サブ」もテープなどと同様ひとつの「素材」ということになります。一般の方には馴染みの薄い、しかし放送局にとって最も重要なこの設備は、社屋のほぼ中央部に位置しています（何階にあるかは秘密）。

この10年ほどで、「マスター」の役割は飛躍的に重くなりました。放送素材は、生放送のスタジオや収録されたテープ、ネット局や海外からのマイクロ回線、あるいはCGなど多岐に渡ります。局からの送り出しはテレビ・ラジオの二波ですが、テレビは従来のアナログ放送に加え2003年からデジタル放送も行っています。2006年からは「ワンセグ」が始まり、合わせて4系統の放送を並行して送り出すことが必要です。

実はこのデジタル放送、送り出す側にとっては結構なクセ者で、映像・音声ともクオリティが格段に向上した上、データ放送、EPG（電子番組表）など、多機能が売り物。ということは素材の数も容量も増える一方です。放送機器のIP化が進み、制御データは複雑を極めます。

デジタル放送が始まったことで、よく言われる「放送と通信の融合」が視野に入ってきました。これからの放送局は、コンテンツを創って「放送」するだけでなく、通信メディアと上手に連携していくことが課題となります。しかし、通信との連携を「どのように」行っていくのかの具体論は、まだまだ手探り状態です。ということは、設備的には、「4系統の放送を正確に送り出し、かつ近い将来の通信との連携が可能なよう発展性・拡張性を担保する」ことが条件となります。もちろんコストの問題もありますから、建物の設計と同様、こちらもめまいのするような複雑なパズルです。

＜工夫と苦労＞

こういった諸条件のクリアのため、朝日放送の技術陣は、「スーパーマスター」という概念を導入しました。4つの系統の放送をバラバラに行うのではなく、制御の場所を統合し、効率よくかつ正確に行うという考え方です。新社屋の「スーパーマスター」は、3系統のテレビと1系統のラジオを一箇所から統合してコントロールする設計となっています。

ご存知のようにアナログテレビ放送は、2011年7月24日に終了することになっています。ということは、今回の設備のうち1系統はあと2年半で不要になる系統なのです。正直もったいない気もしますが、空いた系統はデジタル放送の発展的なサービスに転化できるようにしています。

最近、家庭でのテレビ録画の主流がHDDとなっているように、放送局でもビデオテープからHDDへの移行が進んでいます。ただ、「ムーアの法則」通り、容量の増加と価格の低下が進んでいる最中でもあり、「完全テープレス」が果たして費用対効果と安定性の面でどうなのか、議論になりました。結果とられたのが「とりあえずは“ほぼ”テープレス、いずれ完全テープレスに」という、なんとも大人の結論でした。

新規に購入した設備も多かったのですが、旧社屋で使用していた設備もかなり「生かして」移設しました。移設といっても、放送は休めませんから、綿密な計画を組み、番組収録のスケジュールも調整しての大掛かりな移転でした。建物自体の完成は2008年1月でしたが、設備の搬入・設置からそれぞれのテスト、全体のテストを繰り返し、すべての人と番組の移転が終わったのが8月のことでした。ひとつひとつの苦労をあげればキリがないが、とにかくすべてを正確に、遅れないよう、長期間緊張を保つことが一番しんどかった、というのが技術スタッフの本音のようです。

＜おわりに＞

長々と社屋のことを書きました。本当の課題は、「これから『創造工場』をどう活用してよりよいコンテンツを産み出していくか」です。取り巻く経済環境が厳しい中ですが、60年近いものづくりの「たましい」をこの新社屋に吹き込んでいきたいと願っています。

（通信　昭和42年卒）